

第2回 札幌市生涯学習推進検討会議 概要録

1 会議次第

(1) 協議事項

第3次札幌市生涯学習推進構想の施策体系について

(2) その他

2 日時

平成28年(2016年)8月29日(月)9時30分～11時30分

3 場所

札幌市教育委員会4階 委員会会議室

4 出席者

(1) 委員(12名)

石井委員、臼井委員、大森委員、喜多委員、木村委員、佐久間委員、佐々木委員、竹川委員、平島委員、三上委員、三坂委員、和田委員

(2) 事務局(5名)

山根生涯学習部長、大場生涯学習推進課長、近藤生涯学習係長、齋藤社会教育主事、永山社会教育主事

5 開催形態

公開(傍聴者1名)

6 主な議事の内容

(1) 協議事項

第3次札幌市生涯学習推進構想の施策体系について

<参考資料「第6期図書館協議会への諮問」について>

- ・近藤係長より、参考資料「第6期図書館協議会への諮問」について説明があった。「生涯学習社会の中で札幌市図書館が果たす役割について」というテーマでの諮問であり、第3次札幌市生涯学習推進構想の内容を考えるにあたって考慮すべき事柄として説明。答申は10月末を予定。

<第3次札幌市生涯学習推進構想の施策体系表について>

- ・近藤係長より、資料1「第3次札幌市生涯学習推進構想 施策体系表」、資料2として「第1回札幌市生涯学習推進検討会議を踏まえた資料の変更点」の説明があった。委員意見は以下のとおり。

- ・構想の全体像が見えた段階で検討するとのことだが、札幌市としての特徴・看板が欲しい。前回会議で、札幌に限定しすぎてはいけないという議論もあったが、札幌市民の誇りになるようなフレーズができれば良い。（和田委員）
 - ・重点施策は説得力がある。自分も人材育成に関わっているが、この部分がなければまちの発展はないと思う。基本施策のⅠⅡⅢがバランス良く関わることが大切。（和田委員）
 - ・世代間交流ということをもっと明確に出したい。施策の方向性1「各世代のニーズに応じた学習機会の提供」では各世代のことが述べられているが、そこがつながったり、お互いが影響し合ったりして、学ぶ部分があれば、歴史や文化の継承がより自然に起こる。全体には盛り込まれていると思うが、もっとはっきりと出すべき。（三坂委員）
- 世代間の交流は人づくり・地域づくりのどちらに関係するのだろうか。（佐久間議長）
- とりあえずは地域から行われれば、そこから広がっていく。今は世代で区切られているという意識になっているので、子どもから学ぶとか、子どもの視点を取り込むことが自然なことになれば、学校にも違う視点が生まれてくると思う。（三坂委員）
- ・「札幌らしさ」というのは自分も気になった点。施策を網羅することで、札幌市としての特徴が見えなくなるので、そこに踏み込みたい。（平島委員）
 - ・全体的に家庭教育の視点がもう少し入れれば良い。家庭教育・親育ちについてもっと書き込むことで、「子育てしやすいまち」という点が札幌市の特徴となり得るのでは。それに付随して、ワークライフバランスの視点を入れたい。結局、「仕事が忙しくて学習できない」という現状がある。（平島委員）
- 親の学び・ワークライフバランスは展開項目2「成人期の多様なニーズに対応するための学びの充実」に含まれる想定。また、男女共同参画という視点では、展開項目4「現代的・社会的な課題に対応した学習機会の充実」にも含まれる。
- （近藤係長）
- ・学習したことをどう評価するか、成果を社会にどう生かすかという点が不十分な印象。生涯学習施策は機会を与えたり、場所を与えたりしているが、市民はそれをリターンするというところをもっと明記できれば。（平島委員）
 - ・基本施策の文言は整理が必要だが、組み替えたことで、前回より良くなった。具体的に何をすることが現れていて、構想として良くなった。前回会議で、まちづく

りセンターを学んだ成果の実践に生かす旨の意見があったが、展開項目 19「時代の変化に対応した生涯学習関連施設の運営、機能強化」に書き込めれば。「社会に対して責任を果たす実践」という視点が見え、社会と関わる人々の中で実践されなければならないことが表される。（竹川委員）

- ・「人材育成」という文言があるが、生涯教育ではなく生涯学習であること、つまり生涯学習の自主性を考えると違和感を覚える。展開項目 9「札幌のまちを支える人材の育成」を「札幌のまちを支える人の輪を醸成する」とすれば、自立した札幌人が支える、大人の社会が見えてくる。（竹川委員）
- ・体系図自体は生涯学習に必要な基礎的な部分が網羅されているが、展開項目 1「幼児・青少年期を育む学びの充実」について、幼児と青少年期は別の項目とすべき。幼児と青少年期とでは生じる問題が異なり、特に青少年には、就労や中等教育の課題もある。青少年期の活動・学びは札幌市として重要な項目。（佐々木委員）
- ・人材育成という文言については、竹川委員と同意見。生涯学習の大きな狙いとして、特に成人に関しては自主決定学習という要素があるので、「育成」というよりは、自分自身が自分の学習すべきことを決定して、活動したり学んでいったりするという姿勢が大事。（佐々木委員）
- ・体系表の左下に「これからの生涯学習施策に対し、特に期待される役割」とあるが、この位置に違和感がある。「特にこういうことを大切にしていきたい」ということなので、3つの基本施策を貫くような形で「これがやりたいことだ」という内容がはっきり示されるような工夫が必要。（木村委員）
- ・基本施策ⅠⅡⅢに対して、具体的にこういうことをしていかなければならないということが展開項目となっている。ただ、中には学びの質だったり、学びの中身になっていたりするものもあるので、すみわけが難しい。当然関連し合う、重なり合うものではあるが、具体的な事業を展開していくときに、所轄を十分考えておかないと、その重なりが連携せずに、どちらにも関係ないこととして連携が機能しない可能性もある。例えば、展開項目 15「社会人の学び直しなどの支援」でキャリアアップや再就職という言葉が出てきたが、方向性 2「多様な学習機会の提供」のところにも当然その人々は位置付けられて、展開項目の中身にも入ってくる。環境を充実させるための施策としてやっていくことなどの検討が必要。（木村委員）

→構想の事業としては再掲もあり得ると思うが、検討が必要。（佐久間議長）

- ・展開項目3「高齢期を豊かに過ごす学びの充実」に入っているとは思いますが、全体を見て、健康という視点が弱いように感じた。今、メディコ・ポリス構想のように、医療と福祉が連携してまちづくりをしていくという考え方もある。また、子どもにとっても健康は大事。スポーツの振興には入っている内容かとは思いますが、もう少し項目として強調しても良い。（喜多委員）
 - ・障がいのある人の学び、途中から障がいを持つことになった人々のための学び、また、そういう方々を理解するための学びも重要なので、その視点を入れられれば良い。（喜多委員）
 - ・人材育成とあるが、素敵な人材は既に地域にいる。育てるというより「発掘する」という視点も、展開項目9「札幌のまちを支える人材の育成」に取り入れられれば。（喜多委員）
 - ・「充実」「推進」という文言が施策の方向性と展開項目の両方に書いてあるので今後整理されていくものだとは思いますが、展開項目11「学習活動の発表や学びをきっかけにした交流の場の充実」で、今ある場所を充実させるという考え方もあるが、そのような場を増やすという方が、学びの場・まちづくりの場が広がると思う。（喜多委員）
 - ・基本施策は「～づくり」となっているが、学習という視点から見ると、「豊かな人生を営むための学習」「自らの仕事の枠を広げるための学習」があり、その他のところに「まちづくり」がある。まちづくりは他の2つとは違う体系にあるので、まちづくりという部分を詳しく、強化することが、札幌市のつくる生涯学習体系のひとつの特徴になると思った。展開項目9「札幌のまちを支える人材の育成」とあり、不足と言われる観光人材の育成を想定していたり、障がい者のための学びを行うべきという委員意見あったが、NPO法人などのいろいろな主体がそのような取組を行っている。展開項目21「学びの場の連携の推進」にも関連するが、商工会議所・商店街・NPO法人などの生涯学習を行う様々な主体や、それらの主体により作られる場があり、どのように連携していくかという視点が施策を具体化する中で必要になる。先ほど委員意見にあった、まちづくりセンターを生涯学習施策として活用することについては、まちづくりセンターは所管や関係する法令も違い、大変難しいことだと思うが、そのようなことを行うためにも横の連携が大切。まちづくり政策局のような部署が音頭を取れるような仕組みができれば、他の都市にはない構想となる。（大森委員）
- 構想策定後に関連事業のぶら下げをした際、教育委員会で行う事業以外の事業も

入ってくるので、連携は重要な視点。（佐久間議長）

- ・まとまっているのは良いが、まとまり過ぎて物足りない印象。生涯学習があくまでゴールになっているが、生涯学習施策を推進していったときに、最終的にどのような社会を目指すのかという部分が見えてこない。人々がそれぞれに共有するような、シェアし合うことに価値を持った社会を目指す社会だと思う。ゴールイメージは、現時点ではそれが左下の「これからの生涯学習に対し、特に期待される役割」に少しあるのかもしれないが、もっと前提としてあるべきと感じた。共有価値、シェアード・バリューというか、みんなが共有し合う価値をつくる。現時点のものは「人々が学習して、豊かな人生になって、地域のつながりができて、良かった」と小さなまとまりになっており、それが「札幌らしさが足りない」という部分につながっているのでは。もっと「こういう社会にチャレンジしていくための生涯学習なんだ、人々がこうなってほしいための生涯学習なんだ」という大胆なもの・チャレンジ精神が足りないと感じた。（臼井委員）
- ・障がい者を含めた、ダイバーシティ・多様性のところを施策の方向性や展開項目に入れ込んでいくときのスタンスとして、札幌市が生涯学習のことを全て支えるという視点ではなく、生涯学習に取り組んでいる方々が協力し合って足りない部分を補い、うまくいかない方々を支え合うみたいなことをもっと出しても良い。学習の参加者がもっと主体的に協力し合って進めていく、というところがほしい。（臼井委員）
- ・I人づくりの中に「コーディネートする人材の育成」が入っているが、コーディネートは全体に関わるものなので、IIつながりづくりやIII環境づくりに入るのでは。コーディネートする人材がまだ育っていないというスタンスで書いてあるが、それをもっと環境をつくっていくというような、学ぶ人が全てコーディネートする役割を果たしていくような施策になり得ないのかなと感じた。（臼井委員）
- ・施策の展開項目2「成人期の多様なニーズに対応するための学びの充実」とあるが、年齢の幅が広すぎると感じた。子育て世代というので一項目つくっても良いのでは。子育て世代は十数年の短い期間だが、人づくりとしては大事な期間。（石井委員）
- ・人材は地域にいるが、どこでどのように活躍すれば良いかわからないという現状がある。活躍できる場の提供という要素もどこかに入れば良い。（石井委員）
- ・平島委員からワークライフバランスの指摘があった。I人づくりに位置付けるの

も大事だが、Ⅲ環境づくりの問題でもある。どういう働き方をしてるかというのは、学習も含めてそれ以外の生活の側面をどう調整できるのかということになるので、学習の環境づくりの非常に大事な要素としてワークライフバランスがある、という視点は大事にしたい。（三上副議長）

- ・木村委員の御指摘にあった、施策の方向性と展開項目の関係性についてだが、それぞれの層がどういう性格のものなのか確認しながら議論できると良い。おそらく、施策の展開項目は重複しても良いもので、むしろ重複するような施策の方がある意味では優れたものなのでは。1つの施策を行うことで、一石二鳥にも三鳥にもなる、ある施策が複数の展開項目に挙がってくるのはむしろ良いことと考えられる。一方で、今回の構想の目的は生涯学習施策の体系化。基本施策・方向性で漏れや重複があると混乱するので、それぞれの階層の性格を確認しながら議論すべき。（三上副議長）
- ・喜多委員から、人材は育てるというよりもむしろ地域の中から発掘することが大事という御指摘があったが、臼井委員のどういう社会を目指すかという点とも関連する。人口の減少はまちづくり戦略ビジョンでもこれからの札幌を規定する重要な条件だと言われている、どのように都市の活力を保っていくかが札幌市としての大きな課題とされている。そのような状況で、構想では新しいものを作るとか充実させるという点も大事だが、既存のものをどううまく維持するかという視点であったり、連携して一つのをどうシェアして使いまわすか、今あるものをメンテナンスしながら良い状態でどう長く使っていくか、「メンテナンス・シェア・リユース」というのが、今後札幌がどんな社会を目指していくのかという視点とつながっていると思った。札幌市としての特徴・看板がほしいという意見があったが、まちづくり戦略ビジョンの個別計画なので、基本的にはそれを参照することになると思うが、ビジョンでは「魅力と活力あるまち」と「安心して暮らせるまち」が言われており、すごく札幌市のまちの特徴を表現していると思う。活気・活力と安心のバランスを一つのまちにどのようにうまく作り出していくかという点に札幌らしさがあるので、そういう方向を学習としてどのように目指していくか、という考え方もたたき台としてある。（三上副議長）
- ・コーディネーター人材の育成については、「コーディネーターを育成すること」が目的ではなく、「そのような人が市民の学習を支援すること」が目的ということになると、コーディネーターの育成は環境づくりとなるので、展開項目 10「学びをコーディネートする人材の育成」の位置については考える余地がある。生涯学

習の振興において学習環境というのは重要な要素で、自発的・自主性が重視される中で、学習情報提供や学習相談、指導者・支援者・コーディネーターの養成・発掘・育成も環境の側面から見ることができる。学習成果の評価・活用、生涯学習関連施設の整備・充実・ネットワーク、さらには生涯学習に関する様々な団体の支援も環境。その側面で捉えると、「育成」という文言についての議論はあるが、Ⅲ環境づくりとして、コーディネーターの育成という内容を置く方がしっくりくるかと。（佐久間議長）

- ・「育成」という言葉になると、自分のことから離れてしまうイメージがある。構想は、市民一人一人が日々を営んでいく考え方に刺激を与えるものなのかな、と最初は思ってたが、このようになると、どうしても一人一人の市民とは別の視点が強くなってしまったと思った。どのくらいの人が構想を目にして、本気で読むかはわからないが、やはり構想のあるまちの中で、誰かが何かをやってくれるというのではなく、一市民として自分が日々生きてるんだということを感じ取れるということもすごく大事。それにより、主体的な市民が育っていく。表現は難しいが、育成という言葉がそれとは異なるイメージを市民に与えてしまう気がする。（三坂委員）
- ・生涯学習支援の主語はあくまで市民という観点で体系化を進めているが、人づくりとしてまとめたときに「札幌市として、コーディネートする人材がほしい」ということが全面に出過ぎていたと改めて感じた。地域、札幌市の様々な分野には既にそういった方がいて、その方々がどのように表に出ていけるようになるか、生涯学習という装置でどのように取り組むかというのが3次構想が求める姿という観点もある。Ⅰ～Ⅲの基本施策からどこまで展開できるかという点や、市民が主役という観点での文言整理については考えていきたい。（近藤係長）
- ・前回会議意見にあった、あくまで視点は地域に根差しながらも、世界を見ていくという視点がまちづくり戦略ビジョンの2つの都市像にもつながると思った。その点からも地域でどう生涯学習を進めていくかということと、活力・創造性を持った生涯学習をどう展開できるかというのを、3次構想の追い求めるものとして方向付けしていきたいと感じた。（近藤係長）

<重点施策について>

- ・施策の展開項目「18 身近な地域で学びを深められる環境の整備」は具体的にどのような事業を想定しているのか。（三上副議長）

→未確定な部分だが、図書館協議会から今後出される答申が関係するかと。身近な

施設としての図書館、また生涯学習の入り口としての読書活動を推進する施設として何ができるか、など。「身近な」という点では、取り入れられる新しい要素がある。（近藤係長）

- ・展開項目 18「身近な地域で学びを深められる環境の整備」と 19「時代の変化に対応した生涯学習関連施設の運営、機能強化」の違いは。（三上副議長）

→18 は新しい取組、19 は既に主に指定管理制度のもとで行われている、生涯学習センターをはじめとする施設の運営や、18 と重複する部分もあるが、図書館の運営を進めていくというもの。（近藤係長）

- ・展開項目 9「札幌のまちを支える人材の育成」はまさに札幌らしさが出る部分。12「地域と学校が支え合ってつくる学びの推進」はサタデースクール事業などを実施しており、中教審からは地域学校協働本部の答申がなされている。そういった流れを汲むと、重点施策となり得るので異論はない。（佐久間議長）

- ・展開項目 5「スポーツの振興」、6「文化芸術の振興」の「振興」という文言は展開項目の文言として違和感がある。全ての世代に一生涯、学習の機会があるというのを強調する必要はない。しかし、世代間が交流するということで、自立した社会人をつくるという点は大切。ここに世代間が交流する文化芸術、スポーツという内容であれば妥当。まだ社会へ出ていない子どもたちや親世代と一緒に、相互に社会参加するという内容は、芸術やスポーツになじみやすい。（竹川委員）

- ・展開項目 9「札幌のまちを支える人材の育成」は社会課題を解決するということだったので、札幌の社会的課題を解決する人材を育成していけば、いろいろな内容を入れていけるので、重点施策となり得る。（平島委員）

- ・Ⅲ環境づくりに人材育成を入れる方がしっくりくる。「環境」という言葉からはハードの部分だけをイメージしてしまいがちだが、ハードの部分は、今あるものをどう生かしていくかというのが大事なので、それに伴う人材が必要。そのような人材育成は環境整備に入れた方がわかりやすい。（三坂委員）

- ・複数の施策にまたがっている展開項目の方が効果が高いはず、と先ほど申しあげたが、重点施策として取り上げるものというのは、2つ以上の基本施策を当然カバーするようなものであるべきと思う。今、上がっている重点施策もそういうものかと。例えば、サタデースクール事業は学校と地域のつながりをつくるというだけではなくて、おそらくそれ自体が重要な学習機会になっているだろうし、学校という場を生涯学習関連施設として位置付けるということにもなっていて、環

境の充実の可能性を開発するということにも寄与する事業になっている。重点施策のプレゼンテーションの仕方として、どこかの施策の中に位置付けるのではなくて、複数のものが同時にできるので重点施策なのだという示し方をする方が理に適っている。（三上副議長）

- ・なぜ重点施策なのかという説得性という意味では、三上委員の意見のとおり、重なり合うところがあるという表現が良いかと思った。（和田委員）
- ・三上委員の御意見にあった、メンテナンス・リユース、つまり1次構想・2次構想でできあがった既存のいろいろな施設やシステムをうまく整理・活用するというようなあたりも、逆に時代的な意義があると思った。その表現の仕方として、表に打ち出すのはおかしいかもしれないが、次から次へと作っていくのではなくて、今できているもの・人も含めて再発見・再発掘という視点が重要。（和田委員）
- ・自分は図書館協議会にも参加している。図書館は図書館で、生涯学習の関連として何ができるかということ話し合っている最中。「既存の」という部分でいうと、既存の組織を変えられる状況にない中、生涯学習との関連の中で図書館自身も新しいことをやっていかなければという必要性を感じていて、新たにできることや、他の機関との関係性などを考えているところ。今までどちらかと言うと、図書館からこういう活動ができますよという情報提供・場の提供をするというよりは、静けさを破るものを排除するような傾向があったが、これからはそうではないという議論があった。海外では、図書館の中にいろいろなブースがあり、各世代に開かれた形で様々な展開をしていて、これからの図書館はこのようにあるべきではという意見もあった。いろいろな機関と連携しながら市民のニーズに応える様々な取組をしていかなければならないということで、具体的な意見もいくつか出ているところ。重点施策の関連での動きということで、発言させていただいた。（木村委員）
- ・学校図書館地域開放事業も札幌市の特徴。身近な地域にある学校図書館で、そこが地域のコミュニティになったり、発信をする機会があったりする。図書館と言うとおおげさに考えがちだが、地域にはいろんな規模の図書館があるので、そこが知の源になるという意味では、非常に有効に使える場。（三坂委員）
- ・展開項目 18「身近な地域で学びを深められる環境の整備」に関連し、ヨーロッパでは道端に本棚があってそこで本を読めるという取組もあり、そのような環境は大事と思う。また、そういったものを地域に任せて自由にやらせてくれる環境の

整備、まちの人が主体になって行政の仕事ができる環境整備が必要。「主体的に」というところが本当に大事。自分はそのようには思っていないが、北海道の人は「行政の人がやってくれる」と思っている人が多いと言われている。主体的に自ら取り組めるような環境整備が、今後重要になってくるので、商店街・学校など、まちの中でふつふつと自主的な活動ができる行政の施策や条例を整えるなどの環境整備が必要。（喜多委員）

- ・企業により、市民が自由に使える本棚が設置されたという事例もある。行政、市民一人一人だけでなく、企業もそういったものに基づいた視点で商売を考えていくというふうにすると、CSRの視点も含めて、みんながそれに向かっているというような姿勢をつくっていくというのが、札幌のまちに必要な要素。（三坂委員）
- ・第3次札幌市生涯学習推進構想はあくまで行政の施策についての構想だが、その中で「市民への期待」「企業への期待」を書くことができるのでは。（佐久間議長）
- ・まちづくりに関わる人材の発掘は非常に重要なので、展開項目20「学びを進める人材登録・紹介制度、出前講座の展開」にも、発掘の要素が入ると良い。（大森委員）
- ・展開項目9「札幌のまちを支える人材の育成」で、生涯学習で学び合う協力体制みたいなもの、そのような人々を育てるという視点があると良い。例えば、耳の不自由な人が講座を受講したときに、受講生の一人が講師の話をパソコンの画面に打ち込み、それを見ることで耳の不自由な受講生は講師の話を理解することができ、打ち込んだ受講生にとっても講師の話が頭に入ったというような、そういった市民をむしろこの生涯学習では求めていくんだという姿勢があっても良いのでは。（臼井委員）
- ・スポーツや文化芸術について考えると、これらは全て“play”という動詞が用いられる。Playと言うと日本では遊びのイメージが強いが、“play tennis”“play the piano”のように、playの感覚を広げて学習概念を捉えていくと、もっと身近に学びを楽しめたり、深められたりする環境というような、広がりのある概念となる。展開項目18「身近な地域で学びを深められる環境の整備」にそのような概念を含められると良い。（臼井委員）
- ・自分は永山記念公園の再開発に関するワークショップの企画メンバーになっている。地域市民・行政・企業など、プロの人々が連携して再開発をしていこうとい

う会で、それ自体が生涯学習だったのだと感じた。展開項目 18「身近な地域で学びを深められる環境の整備」に関連するが、行政が主体となって、ワークショップを主催し、地域の皆さんや企業に声をかけてくれたからこそ立ち上げられた会なので、そういった意味で、環境の整備としては行政が主体となってまずやってみて、そこから声をかけていく姿勢が大事と思った。また、この会を振り返って思ったことだが、展開項目 12「地域と学校が支え合ってつくる学びの推進」に企業という視点も入れると、行政・市民・学校の中に民間企業のよりおもしろい視点も入ってきて、まちづくりや人づくりが活性化すると感じた。（石井委員）

- ・札幌に住んでいる外国人への教育、大人への日本語教育も構想に含んでほしい。

（佐々木委員）

- ・展開項目 6「文化芸術の振興」は北海道内の他の地域とは違う特徴が出せるので、札幌らしさを出すことのできる項目。大都市部の特徴として、大人も子どもも様々な芸術に触れる機会が他の地域より多く存在する。幼児・青少年期の項目に合わせると、情操教育として都市部の大きな特徴となり得るのでは。（佐々木委員）

- ・展開項目 18「身近な地域で学びを深められる環境の整備」に関連し、結局良い社会をつくるためには高度な研究・知見を使うという姿勢を持たないと素人の社会になってしまうので、図書館が開かれた図書館になり、そこでいろいろな催しがあるのであれば、それに関連してどういう研究論文があるのか知れることが大事。研究されたものをベースにしながら実践にそれを取り込むということが、生涯学習の質を高めることになる。図書館司書が「このことについて何か文献がありますか」という質問に対して答えられるような能力を持つことが重要。そうすると図書館が知恵の場所になる。（竹川委員）

- ・文科省のホームページなどを見ると、少子化や家庭教育について厚く取り上げられている。それを市町村がやっていくと考えたときに、もう少し展開項目として強く打ち出しても良いのでは。（平島委員）

(2) その他

○次回会議は10月24日を予定。